



## 〈物語〉とは何か

新潟大学医学部  
保健学科看護学専攻 基礎看護学講座 宮坂道夫

### 〈物語〉の広がり

NBMのN、つまり〈narrative=物語〉とは何だろうか。この基本的な問いに答えるのは、実はたいへんに難しい。物語という語は、最近では人文・社会科学の広い領域で使われており、しかもその意味内容は実に多様である。昨年お話をうかがう機会があった、この分野に造詣の深いある哲学者は、物語という言葉は使う人によって意味が違うと言っておられた。文献を眺めていると確かにその通りで、姿形の異なる樹木が立ち並ぶ雑木林に踏み込んだような気になってくる。それでも、物語という言葉の定義よりも、それを使おうとする人たちの動機や関心の流れを追ってゆくと、何となくではあるが、この語が医療も含めた幅広い分野で使われるようになってきた理由が見えてくるように思う。

医療者が関心を抱く物語とは、患者が病や実人生について語る〈生の物語=life narrative〉である。しかし、物語という言葉聞いてまず思い浮かぶのは、『源氏物語』のような文学作品としての物語の方だろう。患者の語る物語と文学フィクションとはまったく別物に思える。しかし、両者をよくよく比べていくと、実はそんなに大きな違いはないことがわかってくる。どちらも始まりがあって、終わりがある。語り口は様々だが、様々な出来事の叙述がある。患者の物語も文学作品も、例えばカルテのような〈事実の記述〉以上の情報を含んでいる。そこに登場する人々がとった行動だけでなく、その時に何を見て、何を思ったかが語られる。〈語られないこと〉もある。何を語り、

何を語らないかを取捨選択するのは、患者であり、作者である。

このような類似性は、文学研究の一領域である〈物語論=narratology〉では、もはや当然のこととして受け入れられている。たとえば、ジュネットによれば、物語とは①物語内容（語られた出来事の総体）、②物語言説（それらの出来事を物語る、発話されるか書かれるかした言説）、③語り（語るという行為そのもの）という三つの側面を持っている。『源氏物語』といえ、私たちはその話の内容（物語内容）にばかり注目しがちだが、語り手と聴き手の存在や、語り聴くという行為、および物語を伝える媒体にまで視点が拡大しているのである。

### 〈物語〉の背後にあるまなざしの転換

文学研究での物語に対する視点の拡大は、現代思想の潮流と深く関係している。その潮流をあえて一言でいうならば、〈正当なものとして権威づけられ、固定されたまなざしの正当性への疑問〉といえるように思える。たとえば、「正常者」と「異常者」の線引きへの疑問（フーコー『狂気の歴史』）、「世界の中心」である西洋社会と「辺境」である非西洋社会という世界認識への疑問（レヴィ・ストロース『悲しき熱帯』）、政治や経済の歴史を「正史」と見なしして普通の人々の生活史を記述しない歴史認識への疑問（アリエス『死を前にした人間』）というように。こうした思想家たちは、従来は顧みられることもなかった「普通の」（あるいは「異端の」）人々がそれぞれに生きている固有の〈生の

物語)の中に、人間や社会の真実を見いだそうとした。フーコーは精神病患者を長年にわたって観察し、レヴィ・ストロースは文明化されていない部族の中に入って生活を共にしながら彼らを観察した。アリエスは「日曜歴史家」と自称して、一般大衆の日記などを収集した。彼らに共通しているのは、現実とは単なる科学的事象とは違って、その現実を生きる人それぞれの視点によって異なったものであり、さらにそれが語り手から聴き手へと語られることで、意味づけられ、解釈され、形づくられてゆくものだという認識である。

## 医療における〈物語〉

このような流れから考えれば、NBMの位置づけも見えてくる。NBMはしばしばEBM(証拠に基づいた医療)との対比で語られる。これは、NBM自体に、「〈患者〉ではなく〈病気〉を見る」という近代医学のまなざしへの反省が込められていることをあらわしているように思う。医学的データからは最適な治療法でも、患者にとってはそうではない場合もあるかもしれない。たとえば、医学的適応だけでなく、患者のQOLを視野に入れて治療やケアの方法を選択することは、今日では当然のこととされているはずだが、QOLの評価は「証拠に基づいた客観的評価」だけでは不可能であり、個々の患者に固有の価値観に基づいて評価すべきものである。したがって、医療者は、患者個々の生のなかで抱かれている価値観を知るために、患者個々の生の物語に耳を傾けざるをえない。そこからNBMが始まる。

これは患者の立場からすれば歓迎すべきことで、まさに「患者中心の医療」の実践にほかならない。しかし、医療者の側にとっては必ずしも簡単なことではない。NBMを誠実に実践しようとすると、一つの難問に悩まされることになる。それは、物語をどう評価し、解釈し、理解すればよいのかという問題である。患者の物語に耳を傾

けること自体はよいとして、その物語をどう捉え、臨床判断にどう反映させてゆけばよいのか。たとえば容易に想像がつくりスクは、患者の物語を、医療者の都合や偏見によって過度に単純化してしまったり、「いかにもありがちな」ステレオタイプなストーリーに当てはめてしまうことであろう。「患者の物語」が、いつの間にか「医療者の物語」に作りかえられてしまう。こうしたことを避けるにはどうしたらよいのか。

この難問に取り組もうとしているのが、早くから物語を積極的に利用してきた領域、つまり精神医学、臨床心理学だと思う。この領域では、患者の物語を語り聴くことそのものがケアとして成り立っている。医療者は患者の物語を、患者自身が語ったり、意味づけたりするのを促したり、手助けしたりする。ここで紹介することはできないが、どこまで患者の物語に立ち入るべきか、どのような価値観に基づいて意味づけを促すかについて、すでに様々な議論が行われている。

むろん、一般の医療では、患者の物語をめぐって、ここまでの働きかけをする必要はあまりないのだろう。それでも、患者の物語を基礎に置いて、そこから何らかの臨床判断をしてゆくのであれば、医療者は自分の立場を決めなければならないようにも思う。「事実は小説より奇なり」というように、患者の物語は文学フィクション以上に複雑な、深い森のようなものである。それを外から眺めているのか、そこに分け入ってゆくのか。黙って「森の声」を聴いているのか、それとも何らかの働きかけをするのか。このような問いかけをしてゆくことが、NBMの本質として求められるような気がする。そして、このような問いかけを深めてゆくと、患者の側だけではなく、医療者の側にも各人に固有の〈生の物語〉があることに突き当たるのではないだろうか。NBMとは、そうした気づきの上に成り立つものであってほしい——これは筆者の素朴な感想にすぎないが。



# 「看護における NBC と EBC」

医学部保健学科看護学専攻 佐山光子  
小児母性看護学講座

看護は激動期を迎えています。看護等の人材確保法が成立した1992年時点で大学の看護教育は14校でした。現在は90校を超え、本学も医学部保健学科として4年制教育がスタートしています。これからは、現場と教育の循環型学習の充実を図りつつ、大学教育が人材育成の主流となるでしょう。看護学が医学や他の学問分野と学際的に連携し、ケアとキュアの統合を目指して協働への歩を進めることができるかどうかは今後にかかっています。同時に、看護の役割や機能の専門性がいっそう問われるようになってきました。

看護の役割には、診療の介助と患者の身の回りの世話だけでなく、食事や排泄といった生活機能の回復のための援助、ターミナルケア、ヘルスプロモーションのための保健指導や健康教育、ライフサイクル各期の健康状況に応じたケアやサポートなどがあります。そこにある看護の機能は、「その人の生き方」への支援です。そのためには、人間の感情や信念、人間関係や生活様式、文化などを複眼的にとらえ、対象の価値観を尊重した関わりが求められています。しかし、必要とされる「関わり」の技術や対象の行動変容をもたらすような「アプローチ」、心身一体の「ケア」技術などに関する看護独自の研究や教育、実践は、発展途上にあります。実践現場は、診療の介助や看護以外の業務が多く、看護本来の仕事に取り組めない状況

にあったこともひとつの理由です。また、対象に寄り添い、優れた実践活動を行っているにも関わらず、それを見過ごしてきた面も少なくありません。それは、看護教育や研究の枠組みが医学モデルに準じており、科学的で生物学的な観点が重視される傾向があったこととも関係しています。

看護からみたEBMとNBMは、生活と心身両面の健康と安寧に関わる医療専門職種として、ケアの理論と技術の構築をめざすものです。身体的な生活機能のケアについては経験的、習慣的な看護行為を見つめ直し、看護技術としてのケアの有効性を実証していく必要があります。それはEvidence Based Careとなるでしょう。他方、こころとからだ、丸ごとのケアは、対象の主観的な問題やその人の語りを受けとめようとする看護の姿勢にかかっています。対象の「物語」に耳を傾け、看護に対するニーズを明らかにしていくことは、医療に反映されてこなかった側面について、対象の代弁者となり、擁護者となる役割（advocacy）を担うことをも含んでいます。それは、Narrative Based Careといえます。

看護はいま、他の学問分野の諸理論や研究手法を看護実践に応用しつつ、EBCとNBCの両方を視座において看護学の理論や概念、研究手法を開発していく時代にきています。